

奄美大島龍郷町浦方言の敬語動詞 [ʔimori] の 世代差・意味差

重野裕美

(2009年10月6日受理)

Generation and Meaning Difference of the Honorific Verb [ʔimori] in Amami Ooshima
Tatsugoucho-ura Dialect

Hiromi Shigeno

Abstract: In this study, I investigated the word ʔimori that is equivalent to *irassharu* in the common language. ʔimori is the most frequently used honorific verb in Tatsugoucho-ura dialect and it functions as a main verb and an auxiliary. These two separate usages were compared with their correspondences in the common language in terms of generation difference. As a result, I found that the middle generation had a tendency to simplify the meaning and the usage of the ʔimori while the old generation had a tendency to maintain the traditional usage. (93 words)

Key words: honorific verbs ʔimori, generation difference, simplification,

キーワード：敬語動詞 ʔimori, 世代差, 簡略化

1. はじめに

奄美諸島では、急速な勢いで共通語化が進み、方言が失われつつある。戦前から始まった方言撲滅運動や本土での進学・就職のため、現在の奄美諸島ではいわゆる共通語が理解できず話せないという話者はほとんど存在しない。一方、共通語化の進展に伴い、伝統方言は衰退の一途をたどっている。現在の奄美では、伝統方言を生活語とする祖父母世代、共通語¹⁾を生活語とする孫子世代、相手によって方言と共通語を使い分ける父母世代の三世代分化が進んでおり、祖父母と孫との会話は共通語で行われるのが一般的である。または、孫世代を聞いて分かるが方言を話すことができない世代と、聞いても分からず、話すこともできない世代に分けることで、四世代分化しているとも捉えることができる。

琉球方言の研究は、沖縄本島方言を中心に研究が進められている。特に、伝統方言における音韻・アクセント・用言の活用などの研究は琉球方言全域におい

て、ほぼ各島報告がそろいつつある。そのような研究がある中、敬語についての研究は、まだ進んでいない分野の一つである。

調査する際、中年層から「方言の敬語は難しく、目上から注意される。だから、方言で無理に敬語を使うより、簡単な共通語の敬語を使って失礼に当たらないようにする」という意見をよく耳にする。当該地域方言の共通語化は急速に進み、伝統方言を生活語とする老年層、伝統方言と共通語を聞き手によって切り替える中年層が存在する。中年層は、共通語と方言の両方を上手く切り替えて使用しているが、敬語に関しては中年層の中でも苦手とする話者は多い。このような理由もあり、敬語の運用面でさらに共通語化が進み、伝統方言の体系が変わりつつあることが指摘できる。

本発表で取りあげる ʔimori は、共通語の尊敬語動詞「いらっしゃる」に相当する敬語動詞である。本稿では、敬語動詞の中で最も使用される ʔimori を取り上げ、龍郷町方言を対象として、世代差の観点から共通語の枠組みを手がかりとしながら、本動詞用法と補

助動詞用法に分けて調査を行った結果を報告する。結果として、以下の3つのことが明らかになった。

- ①本動詞としての尊敬語動詞 ?imori は、老年層では「行く」「来る」「居る」の意味が均一に保たれているのに対して、中年層では「来る」の意味に特化しつつあり、また老年層では謙讓語として使用される表現を尊敬語としても用い始めていること。
- ②補助動詞として、老年層は「て行く」「て来る」「て居る」の意味に、尊敬語補助動詞「テ形+?imori」一形式を用いるのに対し、中年層は「て居る」の意味にその形式の使用が特化しつつあること。
- ③話者と聞き手または話題の人物の関係の敬語体系から、話者と聞き手との関係の敬語体系へと変化しつつあること。

以上の結果を踏まえ、本発表では具体的な資料を示しながら報告するとともに、これからの方向性も示したい。

2. 先行研究

数少ない琉球方言の敬語に関する先行研究として、早くから金城(1931)や岩倉(1932)、仲宗根(1987)があり、奄美大島方言の敬語に関するものは、長田他(1980)・下野(1982)・寺師(1985)があげられる。敬語の体系を意識したものとしては、町(1984)や町(1997)、西岡(2002)がある。それらには各地域の特徴のないいくつかの語を抜き出した記述がなされているが、あげられている項目に偏りがあり、他集落や他の島々との比較が難しい。

琉球方言の中で最も研究が進んでいる沖縄本島すら、まだ敬語における体系的な記述研究は少ない。失われつつある奄美方言の伝統的な敬語体系を適切に記述し、共通語化の流れで中年層がどこに習得の困難さを感じていることを明らかにすることは、年齢の違う方言話者同士の会話を円滑にするために必要であろう。

本発表では、?imori を取り上げて整理し、奄美大島北部方言の敬語法の特徴として、中年層において用法や意味が簡略化していることを報告する。

3. 調査の概要

奄美大島の調査に関して以下、龍郷町の地理的位置と概況、琉球方言内における龍郷町方言の言語学的位置、調査方法を具体的に示す。

3.1. 龍郷町の地理的位置と概況

鹿児島から南へ380km、沖縄本島から北へ300kmの洋上に浮かぶ、年間平均気温が21.3度の亜熱帯気候の島である。行政区画は鹿児島県に属する。周囲

405km、面積719.82km²で、北から順に笠利町・龍郷町・名瀬市・住用村・宇検村・瀬戸内町の7市町村であったが、平成の大合併により笠利町・名瀬市・住用村が奄美市に地名を変更している。

対象とした龍郷町は、大島本島の北部に位置し、北緯28度25分、東経129度35分にあり、東部は旧笠利町に隣接し、西部は旧名瀬市に隣接している。北部に東シナ海、南東部は太平洋をのぞむ地域である。なお、龍郷町の人口は6,288人、世帯数は2,902世帯である(平成21年7月末現在)。

3.2. 琉球方言内における龍郷町方言の言語学的位置

琉球方言の研究分野で行われている方言の下位分類としては、大きく次のように分かれるのが定説の一つである。まず、北琉球方言と南琉球方言とに大きく分けられる。北琉球方言には、奄美諸島および沖縄本島とその周辺の島々の方言が含まれ、南琉球方言には、宮古諸島および八重山諸島の方言が含まれる。したがって、奄美大島方言は北琉球方言に分類され、さらに北大島方言と南大島方言に分けられる。北大島方言には笠利町・龍郷町・名瀬市・大和村・住用村、南大島方言には宇検村と加計呂麻島・請島・与路島を含んだ瀬戸内町となる。よって、龍郷町方言は北大島方言の下位分類に属する。

3.3. 調査方法

調査期間は、2006年7月、2007年1月・3月・4月・8月・11月の計6回の調査を約2年間に渡り行った。本論の調査は、回を重ねるごとにその前の調査結果の補充・補完したものである。計47名(男性23名、女性24名)の方言話者から回答を得られたが、質問票のほぼ全てに答えてもらった男性8名、女性8名、計16名の回答を基に整理・分析を行った。調査した方言話者の内訳を表1に示す。

表1 調査した方言話者の内訳

	調査した人数	?imori を使用する話者	本稿で対象とした話者
10代	1	0	0
20代	3	0	0
30代	3	0	0
40代	5	2	1
50代	13	13	5
60代	7	7	5
70代	8	8	1
80代	7	7	4
計(人)	47	37	16

本稿中、「老年層」「中年層」に分けて世代差の比較を進めるが、「老年層」は60から80代、「中年層」は40代から50代とする。調査は以下の条件で行った。

話者：言語形成期を龍郷町浦集落で過ごした出身者²⁾

第三者：校長先生または話し手が敬語を使用する目上の人³⁾

聞き手：親しい友人

場所：話者の自宅や職場

調査は全て質問票による面接調査であり、作成した質問文を発表者が読み上げ、それを普段使用している方言に翻訳してもらう方法を使った。この方法は話者が質問文に誘導されていることも考えられるが、現実の談話に近い近似的な会話が得られると考えられる。

4. 敬語動詞 ʔimori

ʔimori は「行く」「来る」「居る」の尊敬語動詞であり⁴⁾、共通語の「いらっしゃる」に相当する。仲宗根 (1987) では、沖縄本島・宮古・八重山の敬語法を、共通語の「いらっしゃる」に相当する敬語動詞を取り上げ比較している。その中で、仲宗根は、

「もールン」は、「うモーイン」(今帰仁村字古宇利)、「もーユン」、「もーイン」、「モーユン」、「モーイン」、「モーン」などと変化して、広く沖縄本島およびその属島にわたり、平民敬語として用いられている。なお、海を越えて、奄美大島につながり広がっている。(pp.224)

と述べ、奄美大島方言の ʔimori を沖縄本島方言の平民敬語から来ていることを指摘している⁵⁾。

また、その語構成は、「いみ+おわる」に分けられ、「いみ」は接頭辞、「おわる」は沖縄最古の歌謡集『おもろそうし』の中で多用されている。「行く」「来る」「居る」の尊敬語・尊敬補助動詞の「おわる」だとしている。「いみ」も「おわる」も語源は不明としている。他にも寺師 (1985) では ʔimori は「参る」からきたとしているが、現段階では調査から得られた意味・機能から仲宗根の説を採用することとする。

また ʔimori は、龍郷町方言では語頭の ʔi を落とした ʔmori の形式が多数得られる。このことに関して、ʔimori の言語地理学的研究として下野 (1982) と国語国立研究所 (2006) による『方言文法全国地図』の報告があるが⁶⁾、龍郷町の語頭を脱落させていることは述べられておらず、語頭は落としていない形式があげられている。当該地域方言において、老年層は ʔmori よ ʔimori の方が丁寧な表現であるという認識があるが、中年層では「ʔimori は笠利や名瀬の人た

ちが使う言葉だ」という地域差として捉えられている。なぜ龍郷町方言だけが語頭を脱落させているのかについては、今後の課題として、本稿では指摘するだけに留める。また、表記も ʔmori ではなく ʔimori を 80代は用いるため、ʔimori として論を進める。

当該地域方言には、動詞の終止形に ri 語尾と n 語尾 (または m 語尾) の二つの形があることが特色である。この語尾の表現機能の問題と、新旧の通時性についていくつかの解釈も存在するが、本稿では便宜上 ri 語尾の形式を終止形として示す。

5. ʔimori の本動詞用法

本動詞としての用法を共通語の枠組みで捉えた場合、どのような範囲に ʔimori が現れるかを調べた。参考にしたのは、現代共通語の辞書である『日本国語大辞典』の「行く」「来る」「居る」の項目の意味である。共通語の「いらっしゃる」でも当てはまらない例文もあるが、ʔimori の意味範囲を考察するため質問票に含めている。

また、数字の示し方だが、「2/10」は「10人中2人」が ʔimori の形式をその意味として回答したことを表しており、無回答や方言で言い換えが困難であったり、他の表現を用いたりした回答は数えていない。

5.1. 一文に ʔimori が一つある場合

現代共通語を手掛かりとしながら、「行く」「来る」「居る」の意味に分けて、当該地域方言と世代別に対照させると表2から表4のようになる。

表2 「行く」の意味における ʔimori の本動詞用法

	本動詞「行く」の辞書の意味	老年層	中年層
(1)	今いる所から向こうの方へ進み動く	10/10	6/6
(2)	一旦近くに進んで来て、向こうへ離れ去る	1/10	0/6
(3)	(年月が)過ぎ去る。ある年齢に達する	0/10	0/6
(4)	死ぬ。逝去する。	10/10	6/6
(5)	(嫁・婿・養子などになって)他家へ移る	1/10	1/6
(6)	愉快になる。満足する。納得する。	0/10	0/6
(7)	物事を行う。また、生活を維持する。	2/10	0/6
(8)	物事が行われる。事が運ぶ。	0/10	0/6
(9)	物事を相当な程度やることができる。	0/10	0/6
(10)	ある基準、目標などに達する。	1/10	0/6

「行く」の意味では、老年層、中年層ともに質問1・4の場合に ʔimori が用いられている。質問1は「行く」の基本的な意味であり、質問4はその派生的な使い方である。質問4は共通語の「いらっしゃる」では非文になるが、奄美大島方言では習慣的な表現として用い

られる。質問5に関しては「お嫁に行く」という意味の「ja taŋi (家を発つ)」という語があるため、?imoriはほとんど用いられなかったと考えられる。中年層の?imoriを用いる範囲は老年層より少ない傾向にある。

表3 「来る」の意味における?imoriの本動詞用法

	本動詞「来る」の辞書的意味	老年層	中年層
(11)	(空間的に)こちらに向かって近づく。	10/10	6/6
(12)	(時間的に)こちらに向かって近づく。	0/10	0/6
(13)	(目的地を主にした言い方で)こちらに行く。	10/10	6/6
(14)	心がある人に向く。慕う気持ちが起こる。	0/10	0/6
(15)	古くなる。いたんでいる。	0/10	0/6
(16)	空腹になる。	0/10	0/6
(17)	(「…と来ている」の形で)ある状態である。	0/10	0/6
(18)	(「…来る」の形で)ある物を取りあげていう。	0/10	0/6
(19)	こちらに向かって言いかける。	0/10	0/6
(20)	(「…から来る」の形で)あることが原因となって現れる。	0/10	0/6
(21)	ある物や状態がその人やその人に関係の深いものに自然に生じる。	0/10	0/6
(22)	自分の心や五感に感じる。	0/10	0/6

表3を参照すると、移動の意味にのみ?imoriが用いられていることが分かる。質問11は「来る」の基本的な意味であり、質問13は共通語では「行く」が当てはまることを「来る」の意味を用いている例である。聞き手側の視点に立って述べられたもので、世代に関係なく用いられていることが確認できる。

表4 「居る」の意味における?imoriの本動詞用法

	本動詞「居る」の辞書的意味	老年層	中年層
(23)	ある場所に存在する。	10/10	5/6
(24)	(鳥・虫など飛ぶのものが)ある物にじっとつかまる。	0/10	0/6
(25)	ある地位につく。	7/10	0/6
(26)	ある場所に居を定める。住む。	10/10	5/6
(27)	ある種類の人間が、抽象的な意味で存在する。	7/10	2/6
(28)	ある人にとって、親族・上司・部下などの社会的関係のもとで、ある人が存在する。	7/10	2/6

表2や表3と比べると、表4では特に老年層における意味範囲が広いことが指摘できる。世代差として質問25・27・28に大きな差が表れている。特に質問25の意味では中年層では、?imoriを用いられていない。

以上、表2から表4の結果から、?imoriの意味用法の世代差を考察すると、老年層は「敬意を表す人物の行動とその支配下にある人物」に対しても?imoriを幅広く用いるが、中年層は「敬意を表す人物の行動」にのみ?imoriを用いており、意味範囲が縮約していると言える。

以上の結果より、老年層と中年層の?imoriの持つ意味範囲は、「行く」「来る」にはほとんど変化がないが、「居る」の意味に中年層は「敬意を表す人物の行動」にのみ意味が特化していく傾向にあることが分かった。

5.2. 一文に?imoriが二つ以上ある場合

ここでは、?imoriの持つ「行く」「来る」「居る」のどの意味に、どの程度用いられるのかを明らかにするために、一文の中で?imoriが二つ以上ある例文を作成し、表れ方の違いを調べた。

表記の方法として、老年層で10人中2人の場合、老(2/10)と表すこととする。

- (29) 先生は学校に行¹って、その後私²の家に来³る。
老(10/10)中(3/6) 老(10/10)中(5/6)
- (30) 先生は朝から学校に行¹って、夜までそこ²に居³る。
老(10/10)中(3/6) 老(10/10)中(2/6)
- (31) 先生は私¹の家に来²て、それから学校へ行³く。
老(10/10)中(4/6) 老(10/10)中(3/6)
- (32) 先生は朝から私¹の家に来²て、夜までここ³に居⁴る。
老(10/10)中(4/6) 老(10/10)中(3/6)
- (33) 先生は教室¹に居²て、それから生徒³の居⁴る運動場へ行⁵く。
老(10/10)中(1/6) 老(0/10)中(0/6)
- 老(10/10)中(2/6)
- (34) 先生は教室¹に居²て、それから校長先生³の居⁴る運動場⁵に来⁶る。
老(10/10)中(1/6) 老(10/10)中(2/6)
- 老(9/10)中(3/6)

結果、老年層は「行く」「来る」「居る」の意味を均一に?imoriの中で保っていることが分かる。また、質問34のように「先生」と「校長先生」の両者の行動に対しても、必ず?imoriを使用している。これは、両者が敬語を用いられるべき目上であるという意識が強いためであろう。

中年層では、?imoriの表す意味が「行く」「来る」の移動の意味と、「居る」の人がそこに存在するという語の基本的な意味に固定されつつあり、また「来る」「行く」「居る」の順に?imoriを使用する傾向がある⁷⁾。また、意味だけではなく、形式としても中年層の場合、?imoriよりも老年層で謙譲語として用いられている

形式を尊敬語として使用し始めていることが明らかになった。

さらに、中年層において謙譲語の形式を尊敬語として使用するばかりか、謙譲語を使用する場面で尊敬語である ʔimori を使用するという場面による混乱も起きていることが調査結果より判明した。老年層も間違いを指摘するだけで、正しい用法を教えるまでは至らない。それゆえ、老年層と話す場合、敬語を用いた会話を要求される中年層の方言話者は、自信のない方言による敬語より、失礼に当たらないように共通語による敬語を用いるようになる。このような循環が、敬語法の面で共通語化をさらに進ませている原因の一つなのだろう。

なぜ、共通語の敬語を使用するとともに、中年層では方言の謙譲語としての形式を尊敬語として用い始めているのだろうか。この原因として現段階で考えられることは、以下の3点である。

- ①一語で3つの意味を使い分けるより、一語に一つの意味の方が単純な体系になるため。
- ②伝統的な方言敬語法が使われている場面に、接する機会が少ないため。
- ③言葉遣いに対する「躰」の内容が、方言の敬語法ではなく共通語の敬語法でも受容されるようになったため。

以上のことを世代別の「行く」「来る」「居る」の尊敬語・謙譲語における体系の変化を示すと以下のように考えると考えられる。

表5 老年層における ʔimori に関わる意味用法

老年層	尊敬語	謙譲語	常態
行く	ʔimori	ʔikjori	ʔikjuri
来る		kjori	kjuri
居る		ʔurjori	ʔuri

表6 中年層における ʔimori に関わる意味用法

中年層	尊敬語	謙譲語	常態
行く	ʔikjori ʔimori	ʔikjori	ʔikjori
来る	kjori ʔimori	kjori	kjuri
居る	ʔurjori ʔimori	ʔurjori	ʔuri

ʔimori の本動詞としての使用が減少傾向にありつつも、まだ尊敬語では依然として中年層においても「て居る」の意味の敬語助動詞として盛んに用いられている。

中年層からは「ʔimori よりも kjori の方が丁寧に思う」という教示を得ているが、これらは ʔimori の待遇価値が中年層において低くなっていることを示すものだろう。

また、本稿では中年層に謙譲語から尊敬語への変化が起っていると指摘したが、それは尊敬語と謙譲語の区別が曖昧になることで、聞き手や敬意を表する相手への行為に対して丁寧なもの言いをしようとする「ていねい語」化への変化の流れとも関係しているだろう。

7. おわりに

本稿では、敬語動詞 ʔimori を取り上げ、世代差の観点から意味や用法の違いを報告した。その結果、老年層は敬語動詞 ʔimori に「行く」「来る」「居る」の三つの意味を均等に保っているのに対して、中年層においては ʔimori とともに併用されて、老年層では謙譲語として用いられている形式を尊敬語として用い始めていることが明らかになった。そのことにより、尊敬語と謙譲語の区別が曖昧となり、中年層では敬体か非敬体の単純な対立となり、敬語法の簡略化が起こっていると考えられる。

今後も、引き続き敬語動詞 ʔimori を中心に調査を進め、奄美大島の南部との地域差についても着目したい。南大島方言では、北大島では一切得られなかった tabori (給ふ) という敬語動詞・敬語助動詞が表れる。龍郷町で調査をする際に tabori について尋ねても、80代の老年層ですら聞いたことがなく「それは島唄の言葉だよ」という意見をよく耳にする。龍郷町の島唄の歌詞には tabori を確認することができる。他の敬語動詞との関係や、地域差として共通語や他の琉球方言において、敬語法がどのような変化をしているのかについても考察を進めたい。一貫性のある調査項目を用いた調査を行うことで、各々の地域差や今までの報告などの再考や、敬語法の面からの方言区画を再検討することができるだろう。敬語法の地域差を詳細に記述することで、奄美大島方言敬語法の独自性を述べたい。

【注】

- 1) 厳密に言えば、「トン普通語」「奄美普通語」と呼ばれる共通語交じりの中間方言を話している。本発表では、伝統方言に着目するため、中間方言については特に触れないことにする。
- 2) 以下、本稿では便宜上、龍郷町浦集落方言を龍郷町方言として扱う。
- 3) 場面設定を第三者に対しての表現にしているの

は、調査段階で70代の老年層でも、第三者の場面設定をした場合、聞き手が目上でないと、話題の人物が目上でも敬語を使用しない方言話者がいる。今回は敬語動詞 ?imori の意味用法を把握したかったため、内省として ?imori を使用するなら、聞き手を目上、話題の人物も目上に設定しなおし、調査を行っている。このことについては今後の課題である。

- 4) 「言う」の敬語動詞でもある。本発表では「行く」「来る」「居る」の意味に関して扱うため、「言う」の意味については、今後考察を進めたい。
- 5) 首里方言では、かつて、平民と士族との間に、階級によることばの違いがあった。『沖縄語辞典』参照。
- 6) 『全国方言文法地図 第6集—表現法編3(待遇)—』第276のB場面、第279のB場面、第282のB場面参照。
- 7) 水谷(2005)「「イラッシャル」に生じている意味領域の縮小」では、「行く」「来る」「いる」の尊敬語形式について、「来る」「いる」としては使用され続けるが、「行く」には用いられなくなりつつあることを指摘している。当該地域の中年層に起きている変化は、意味の収縮ではないが、「来る」に用法が特化されるようになる傾向にあるため、水谷(2005)の変化と関係してくるかもしれない。

【参考文献】

飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(1984)『講座方言学 10—沖縄・奄美地方の方言—』国書刊行会
 岩倉市郎(1932)「喜界島に於ける敬語法」『旅と伝説』

- 第5年第2号, 三元社, pp.65-66
 上村幸雄(1992)「琉球列島の言語」『言語学大辞典 第4巻 世界言語編』三省堂, pp.771-891
 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子(1980)『奄美方言分類辞典 下巻』笠間書院
 金城朝永(1931)「南島方言に於ける敬語法」『旅と伝説』第4年第12号, 三元社, pp.69-74
 国語国立研究所(1963)『沖縄語辞典』国立国語研究所
 国立国語研究所(2006)『方言文法全国地図解説6 付資料一覧』国語国立研究所
 下野雅昭(1982)「奄美大島における待遇表現の地域差—文表現の言語地理学—」(『日本方言研究会第34回発表原稿集』弘文堂)(2001)『日本列島方言叢書 32 琉球方言考⑤(奄美大島他・沖縄属島)』ゆまに書房, pp.498-502(再掲)
 寺師忠夫(1985)『奄美方言の文法』根本書房
 仲宗根政善(1987)『琉球方言の研究』新泉社
 西岡敏(2002)「沖縄語首里方言の敬語付き動詞」『琉球の方言』27号, 97-137
 日本国語大辞典第二版編集委員会(2000)『日本国語大辞典 第二版 第一巻』小学館
 町博光(1984)「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』第19号, pp.49-57
 町博光(1997)「鹿児島県大島郡与論島朝戸方言の待遇表現」『方言資料叢刊 第7巻 方言の待遇表現』方言研究ゼミナール, pp.224-229
 水谷美保(2005)「「イラッシャル」に生じている意味領域の縮小」『日本語の研究』1(4), 日本語学会, pp.32-46

(主任指導教員 町 博光)